
児童健全育成賞（数納賞）佳作

『児童館を作ろう！』

—三輪子どもクラブの4年間—

東京都町田市

三輪子どもクラブ・MIWA～GO 河西里奈

はじめに

当館『三輪子どもクラブ・MIWA～GO』はコロナ禍の2020年6月に東京都町田市三輪緑山に開館した。東京都町田市鶴川三輪緑山地区『緑山スポーツ広場』の敷地の一角に建てられた小型児童館である。鶴川地区を走る唯一の鉄道である小田急電鉄の鶴川駅から山を一つ隔てた緑山地区は、東京都とは言え立地は横浜市、川崎市に隣接しており神奈川県に近い。地域には各学年3クラスほどの規模の小学校が1校あり、卒業すると殆どの子どもが山を越え駅の東側数キロ先の中学校へ進学する。遊び場として『緑山中央公園』など大小の公園が幾つかあるが、安全面において大人の目が常にあるわけでもなく、子どもの居場所にはなりきれていない。最寄りの公共施設といえば隣町横浜市の地区センター、もしくはバスを乗り継いで数キロ離れたところにある鶴川子どもセンターとなるので、三輪緑山地区に住む小学生たちが下校後に自力で気軽に行き帰りできるものではない。子育て中の母親同士の交流の場や、小中学生たちの下校後の居場所が必要であった。

児童館を作ろう！

2018年の秋頃から三輪緑山で工事が始まった。最初は何を建てているかわからなかったが、調べていくと『児童館』であった。当時自分は学童保育事業に携わっていたが、緑山の工事現場を通るたびに建築が進む様子を見るにつけて、ここで新しく施設を立ち上げる仕事をやっ

てみたいと強く思うようになった。児童館の運営受託先は『ワーカーズコープ』であるときとめて、オープニングスタッフに応募し採用内定が出たときは、逃したくないチャンスを掴めて本当に嬉しかった。

コロナ禍で

念願の『三輪子どもクラブ』で働くことが決まった2020年はコロナ禍の初期である。年明け後じわじわと『新型コロナウイルス』感染の恐怖が日常生活に近づいてきて、消毒液もマスクも体温計も品薄となり価格が上がり世間の不安も高まっていた。公共交通機関の中でマスクを着用しない人は批判された。テレビやネットのニュースでは保育の仕事は危険だと報道され悲しくなった。当時自分の二人の子どもたちは学生であったが、母親が危険な仕事に就いていることで学校や周囲から差別を受けることや、この先自分がコロナに罹患した場合近所に知られたら生活が困難になるに違いないという恐怖に毎日襲われていた。それは自分だけではなく、エッセンシャルワーカーとして就業している多くの方々が感じていたと思う。集団心理によって、多くの人たちが特定の職業に就く人々に向かって危険呼ばわりする世間に悲しみを覚えたが、同時に自分はそのようなことをしてはいけないと強く思った。自分の子どもたちには医療・保育・運輸業に関わる方々へ感謝の気持ちを持つように伝えた。自分たちが安全に生活できるのは多くの人々のお陰様であると改め

て感じた。当館は2020年4月開館を目指してはいたが、実情はこんなご時世で児童館の開館どころではないといった風潮でありながらも今更舵を切り替える選択肢もない、何とも言いがたい状況であった。案の定開館は当初の予定の2020年4月ではなくなった。コロナ以前から手配されていた館内の内装が進み、靴箱、大型遊具、電化製品等が順次搬入されていったが開館の見通しは立たず、コロナ禍特有の緊張感が漂い異様な空気であった。

2020年6月～2021年3月 ～ついに開館～

開館は予定から2ヶ月以上遅れ2020年6月8日に決まった。当時は『ついに始まるのだ、どんな子どもたちと出会うのだろうか』という期待と、『コロナ禍で歓迎されない児童館の開館は地域の方々に受け入れてもらえるのだろうか』という不安のせめぎ合いであった。また、終わっていない開館準備のあれこれが雪崩のようであった。受付には飛沫防止の透明シートを取り付けた。新型コロナウイルス対応はもとより館内での地震・災害・不審者・ケガ人対応のフローチャート、利用者に貸し出しするおもちゃやゲームの消毒とメンテナンスのパターン化や館内清掃についてなど職員間の共有事項も多く必要であった。完璧な準備は不可能でもPDCAサイクル（プラン・ドゥ・チェック・アクション）の精神でやれるだけやってみることにした。

開館してみると、予想をはるかに上回る来館者に驚いた。利用者に対して入館規制をすることもしばしばあった。開館前の想定来館数は一日80名程であったが、実際は100名を超える来館が続いた。周りからは『初年度は珍しさから来館者は多いが次年度以降は減っていくものだ。』と言われたが、2021年度以降も来館数は一日平均100名を維持し続け大型行事の日は200名が当たり前、2023年度の開館3周年行事の日の来館者は500名を超えた。雪の日や台風の日も40名程の来館が見られた。開館

後しばらくの間は10～12時開館、12～13:30館内清掃と消毒のため閉館、13:30～開館、17時閉館のかたちを取り、利用者にも検温と手指消毒とマスクの協力をお願いした。限られた時間、限られた人数の職員で優先順位をつけて消毒清掃を行った。まもなく昼時の消毒と清掃はなくなり10時～18時通して開館する本来の姿になったが、来館者の検温・手指消毒・マスク着用はその後3年間続いた。振り返ると長かった。子どもたちも保護者の方々もよく協力してくれたものだと思う。

多数の来館者の理由は、住宅地の中にあり多くの住民にとって徒歩圏内であることと、最寄り駅から緑山住宅を一周して再び駅に戻る循環バスの停留所が至近距離にあるといった立地の良さが挙げられる。小型館なので多くの利用者が安全に過ごせるように、一番大きな体育館様のスペースの利用に関しては年代別、時間帯別として交通整理を行った。平日と土曜日、長期休暇などで時間割を試行錯誤しながら割り振った。まさにPDCAサイクルであった。利用者それぞれの生活パターンが違うので全員が満足できる時間割は不可能であるが、近隣の小中学校や幼稚園の行事に配慮しつつなるべく多くの利用者の希望を拾っていく。

師匠たちと私

保育園や学童保育と児童館は似たような施設に見えるが、前者は『保護者が働いている子どもたちの生活の場』、後者は『0～18歳までの子どもたちと保護者の居場所・地域とのつながりの場』であり役目も性質も大きく異なる。理解しているつもりであったが、実感したのは実際児童館の運営開始後であった。自分に欠けている知識や経験を補いながら安全かつ魅力的な館の運営を維持するため、自分がこれまで培ってきた人々との繋がりを活用し地域に愛される施設の運営をする事を決めた。

学童保育クラブの在職中、私は乳幼児親子との関わりの経験がなく乳幼児クラスの開始に戸惑った。そこで自分の子どもたちがお世話に

『児童館を作ろう！』

なった子育て広場の先生に相談し、2021年度より児童館の乳幼児活動の講師として週1～数日来て頂いている。30分の親子活動であるが構成や進行について無知な自分に色々な学びを授けて下さる。毎회가真剣勝負と心得て、全て学び尽くそうと取り組んでいる途中である。また、地元町田で40年近く活動している『NPO法人まちだ語り手の会』の方々に3ヶ月に一度来て頂きお話を開催している。こちらのセットリストも毎回見事で学びに溢れている。ひろば文庫の代表と出会ったのは2010年頃である。当時自分が働いていた学童保育クラブに、代表が非常勤職員として入職し私達は週に数日共に働いた。最初は『声がきれいで本読みが上手な方だな』と思ったのだが、子どもたちとの関わりもとても上手であった。それもそのはずで、彼女は自宅の一部を地域の子どもたちと子育て中のママたちに開放し、『ひろば文庫』として地域の居場所としていたのだ。まだ町田市内に子どもセンターや児童館を作る流れになる随分前のことである。代表とはウマがあい、私が学童保育事業から児童館に移った後も交流が続いた。子どもの興味を引く手遊びや季節に合った絵本選びのヒントを授けて頂いてはそれらを児童館で試した。また、当館で毎年12月に行っている『ウインターパーティー』では、ひろば文庫スタッフ数名による人形劇や大型絵本、ペープサート、サンタクロース(当館職員による変装)とのじゃんけん大会などを行っている。いずれの取り組みも児童館利用の乳幼児親子や孫と祖父母の方々にとっても喜ばれている。初年度のパーティーの頃は赤ん坊だった子どもたちも今では幼稚園や保育園に通い始めた。当館での夏休み中の水遊び会や、季節のパーティーでは同窓会のように集まり楽しく過ごしている。その際に保護者の方々から感謝を伝えられたりすると行事を開催して良かったと思うし、次回をもっと良いものにしようと励みになる。そのためにはどうしたら良いかを職員同士で振り返り話し合っている。子育てひろばの先生や『NPO法人まちだ語り手の会』、『ひろ

ば文庫』の方々は私の師匠である。師匠たちがかつて地域において担っていた役割を当館も担いたい。今はひたすら学んでいる時期であるが、学ぶことがゴールではない。今後は自分が学んだ事を若い世代の職員に伝えることが自分の役目だと考えている。緑山地区に児童館がなかった頃と現在とでは状況は違うしこれからも変わっていくだろう。自分は師匠たちから学んだこと(インプット)を次世代に伝えていけたら良い(アウトプット)。そのためにはまず後輩の育成をしっかりと行い人数資質ともに高めていき、アウトプットする先を複数作ることが必須である。当館の4年間では、コロナ禍における集団心理の怖さ、子どもたちとの関わり、その他多くの事を学んだ。悲しい事や残念な事の中にも気づきがあるということ、失敗には今後の学びがあるのだからマイナスだけではないということ、経験することの大切さを知った。せっかくなさの素晴らしい学びを得たのだからそれらを自分で終わらせることなく後輩たちにも伝えたいという思いが、児童厚生員二級、一級、指導者養成へのステップアップの原動力となっている。自分たちの仕事はすぐには結果が現れないが地道に続けていきたい。

2021年4月～2022年3月 ～高学年バトル～

開館して10ヶ月、初年度が終わり新学期を迎えた。昨年小学5年生だった子たちは6年生になり、一部の子たちは上級生がいなくなったことで自分たちの時代が来たと言わんばかりであった。集団遊びの時間になるとドッジボールでは自分たちが遊びを仕切り、気に入らない相手に強いボールを投げた。仲良しグループ同士にはボールを当てず、下級生を順番に狙うこともしばしばであった。繰り返し注意をするが止む気配がなく下級生たちは怯えて職員を頼ってくる日が続いた。夏休みに入ると、自分たちが見たことのない相手には中学生であろうと威嚇する始末で目に余った。『行動には理由がある』が私の信条であったが、行動の理由がさつ

ぱりわからなかった。しかもそれは他の子どもたちにも伝染した。一人の時は下級生とも仲良く遊べるのに複数名になると態度が変わってしまう集団心理の怖さについては彼たちに対応するたびに自分の方が学びになった。集団遊びに触れない職員もいたが、たとえ苦手でもやりたくなくとも職員として向き合わなくてはいけないと思った。低学年の子たちも職員に不満を伝えに来ればいい方で、多くは不快に思っても怖くて何も言えずにいた。だからこそ職員が目をそむける姿は絶対に見せないと決めて対応し続けた。下級生たちへの意地悪が目余る時はきつく叱った。彼たちの良くない態度は夏休みがピークで、2学期以降冬休みに向かい徐々に落ち着いていった。そして春休みの来館を最後に、中学入学以降はほとんど姿を見なくなった。今では年に数回顔を出す程度である。彼たちの中で、不安定な時期の児童館の役割が果たされたのだと感じる。年齢的に難しい時期にコロナ禍における生活様式の様々な制限も加わり彼たちも大変であっただろう。自分は学童クラブ勤務が長かったので小学校低学年の特性に慣れていたし、いざこざの仲裁のパターンについても見極めができていたものの、高学年との関わりの実績がないことがはっきり分かった。私は『児童厚生員二級』研修で高学年の特徴も学んでいたが、インプットとアウトプットは大違いであると思い知ると共に学んだことを体現することの難しさを痛感した。自分にもっとスキルがあれば上級生の暴走から下級生たちを守れただろうと思うと自分が情けなかった。本当の人の気持ちを知ることにはできないかも知れないが、ひとつの出来事に対してみんながそれぞれの立場でどのように感じているのかを多角的に捉える技術を身につける必要がある。相手の年齢や特性に合わせて物事を伝える努力をしなければ異年齢間のコミュニケーションが取れないと感じた。自分の取った対応を他の職員に伝える事、他の職員が取った対応を自分が共有することの大切さを学んだ。

地域のチームとの交流① ～FC 町田ゼルビア～

当館は地元町田市のJ2リーグ所属チーム『FC 町田ゼルビア』とも積極的に関わっている。毎年6月に開催している当館の周年行事には、チームのマスコットキャラクターにも参加してもらい来館者と交流している。夏休み中には小学生対象のサッカー体験会『ふれあいゼルビア』を行っている。チームのことやサッカーの楽しさを知ってもらう趣旨で安全のため学年別に定員を設けて行うが、毎回定員に達し好評である。運動が得意でない子たちも楽しめるような内容であるとともに、普段から児童館を利用して場所に慣れている子だけではなく夏休みのイベントだけ参加する子、初めて来館する子も気後れせずに楽しめる。コーチは声かけも良いタイミングでしてくれるので、自分たち職員にとってもイベントの組立て方を学ぶ機会となり一石二鳥である。また、ハロウィン時期には『ゼルビア・ハロウィンパレード』を行っている。2022年の10月に小中学生たちの希望者を募り平日の夕方に職員たちの引率でクラブハウスを訪問すると、町田ゼルビアの選手数名とチームスタッフの方々が迎えてくれた。施設見学、サイン会、選手とじゃんけん、『トリックオアトリート』の合い言葉でお菓子をもらった。夕暮れ時の短い時間であるが、コロナ禍でハロウィンのイベントも数年間なかった中で久しぶりに行えたことはとても良かった。子どもたちだけでなく保護者の方々も喜んでくれた。2022年の手応えを経験値として、2023年度はさらにイベントの要素を高め参加者を増やし、仮装もしてゼルビアクラブハウスを訪問し、マスコットキャラクターとのじゃんけん会等を行った。一回目の試みでできなかったこと、やりたいこと、できそうなこと、などを当館と町田ゼルビアとの間で共有・改善して次回以降につなげていけたら良い。PDCAサイクルが生かせる場である。また、冬休みには児童館より徒歩数分で行ける、町田ゼルビアの敷地開放スペースで尻尾とりやドロケイなどの集団遊びを行った。小中学生十

『児童館を作ろう！』

数名で児童館を出発し、信号を2個渡ると到着するわずか数百メートルの距離であるが、行き帰りで高学年が低学年をリードしつつ行動する良い機会となる。今まではJ2リーグの町田ゼルビアであったが今期の戦績が順調で来期はJ1リーグに昇格する。サッカーはよく知らないという世代や子どもたちにも当館での共催行事を通じて認知が進み、緑山で活動している身近なチームを応援して地元の活性化につながればなお良いと思うので、今後も定期的に交流行事を続けていく。

地域のチームとの交流② ～ASV ペスカドーラ町田～

私は以前から地元町田のフットサルチーム『ASV ペスカドーラ町田』事務局の地域担当の方と親しくしていたので、コーチに来て頂き半期に一度『幼児フットサル体験会』を開催している。活動範囲の広がる3～6歳児を対象にした室内でのフットサル体験は、集団生活や習い事が未体験の幼児親子にとってハードルが低く、会場も普段自分たちが利用している場所なので気後れせずに参加できることから毎回定員が埋まり好評である。また、チームのオフィシャル飲料サプライヤーであるサントリービバレッジの自動販売機を館内に設置し売上金の一部を毎月チームに寄付している。毎月の金額はわずかであるが、これからも続けて応援していきたい。体験会の際にはサントリービバレッジの担当方より参加者とコーチに飲料の差し入れを頂きありがたかった。もともと児童館の利用者で体験会に参加した親子もいれば、保護者がフットサル好きで我が子を体験会に連れて来た親子もいる。体験会をきっかけにその後来館してくれることもあり、そんな時は開催して良かったと心から思う。

2022年4月～2023年3月

当館はコロナ禍真只中に開館したため、利用者第一世代の子どもたちはコロナ禍以前からある他の児童館よりも若いという特徴がある。

2022年4月にその第一世代が高校に入学し、通学も以前の徒歩圏内の中学校から電車通学となりついに来館が見られなくなった。分かっただけに寂しさを感じている。彼らが時々思い出したように高校の制服姿で立ち寄ってくると、こちらは親戚のおばちゃん気分で懐かしく嬉しく思う。かわりに幼稚園を卒園した新小学1年生たちが児童館に自力でやってきた。先月までは幼児で、保護者同伴で利用していたのに小学生になったのか！と感慨深い。しかし保護者が同行しないため小学校入学以前よりも目が離せない。子どもの遊びについては昭和の頃はなんでもありであったが、平成～令和に入ってから危ないことは未然に防ぐ防止策の徹底、けがをすれば再発防止策を取らねばならず現場の遊びも大変である。実際は『これは危険、ここまでは大丈夫、これは大丈夫だけどやっちゃダメ』の匙加減はけがをしながら体で覚えていたのだが。転んだら手をつくとか、周りを見ないで走ると人や物にぶつかるとか、言葉で聞いただけではだめで、経験しないと覚えられないことがある。子どもたちを楽しくかつ安全にするにはどうすれば良いか？相手の特性を知らなくてはならない。私は2000年代初期以降生まれのいわゆるZ世代のことをよく知りたいたと強く思った。彼ら世代の流行りごとやアニメ、漫画などにアンテナを張っているが、齢の差を埋めることはできない。自分に足りない部分を埋めるためにもZ世代を雇用しよう！と決めた。そこで『ペスカドーラ町田』の地域担当の方に相談して大学生の選手を2名紹介してもらった。最初は小中学校の長期休みの間限定で保育補助のアルバイトをお願いした。理由は『夏休みバイト』にすれば、仮に合わなかったとしても2ヶ月程の期間限定ならやり切ってくれるだろうと考えたからである。実際来てもらった彼らは小学高学年～中高生世代との関わり方がとても自然で、学ぶ点がたくさんあった。子どもたちと年齢が近くてカッコいいスポーツマンの2人はあっという間に人気者になった。前出の、関わりが難しい

と私が悩んだ小学6年生たちも児童館で2人に出会っていれば違っていたかもしれない。また彼らはアスリートらしく礼儀も正しかった。夏休みの間はドッジボール、バスケットボール、サッカーなどの集団遊びの取りまとめを中心にお願いした。運動が得意な子とそうでない子を見極めて偏りのないようにチーム分けをしてくれた。遊んでみてチーム分けがうまくいかないと分かった時は彼ら自身がゲームに入り、強いチームの一方的な展開にならないようにコントロールしてくれた。それは、遊びの流れを理解していても中年女性の私には身体能力的に不可能なことなので本当に助かった。自分に不足していてなおかつ努力しても自力で補うことが出来ない部分を埋めることが出来たと感じた。当館の午後の目玉は小学生たちの集団遊びのひとつである。その時間がうまく運べてみんなが楽しく遊べた日は、帰宅の際子どもたちと職員共に気分が良いものである。しかし集団遊びがうまくいかず残念な日もある。そんな日は少しでも気持ちが落ち着くような声かけをして送り出す。集団遊びの他には卓球、バトミントン、カードゲーム、ボードゲームもする。長期休みにはドッジボール大会、水鉄砲大会、小学生サッカー教室などの行事も行う。子どもたちにとっては彼らと一緒に、館庭の花と野菜の水やりも楽しみになった。児童館をきっかけに地域のチームの認知が進み、現役スポーツ選手と交流することで子どもたちにとって将来の目標になれば良い。それができれば一石二鳥である。夏休みが終わる頃には子どもたちはすっかり2人と仲良くなった。秋以降も1ヶ月に1～数回アルバイトに入ってもらい、冬休みと春休みには週に数回来てもらった。2023年3月に2度目の『幼児フットサル体験会』を開催した際は、コーチとして2人に体験会に入ってもらったが、参加親子にしてみれば見知った児童館で見知った相手とフットサルが体験できることはのびのびできてよかったと思う。参加者・ペスカドーラ町田・児童館の3者にとってメリットのあるイベントとなったので、今後も同様に

相互に実りあるイベント作りができるように考えたい。国内フットサルのトップリーグ『Fリーグ・ディビジョン1』所属のペスカドーラ町田は今季の戦績が非常に好調である。10月末の時点ではリーグ首位となった。チームと当館との関わりを通じて子どもたちにも保護者世代にも広く知ってもらえたら地域の活性化につながると思う。チームの選手の中に学校教諭を目指している大学生がいたので、同様のアルバイトを当館と同系列の学童保育クラブにも追加で2名紹介して頂いた。働く側・利用者側・雇用側三者にとって良かった。

保育の現場に興味を持っている若い世代や学生との出会いを私は大切にしたいと強く思う。児童館という職業があることさえ世間では知られておらず、保育園か学童保育所かと尋ねられることが少なくない。自分ができることから児童館について発信し、地域の中で認知してもらえるように活動していく。

2023年4月～現在

当館におけるペスカドーラ町田の選手2名も非常勤職員として定着し、子どもたちは楽しく過ごしている。中には小学校での人間関係が児童館での遊びに影響し、来館した途端にもめる場面もあるが、学校や家庭で色々なことがあって児童館に来る、で良いと思う。遊んでも良い、遊ばなくても良い、何かしても良いしなくても良いのである。アンリミットで良いと思う。コロナ禍でできなかった調理イベントは2023年度から月一回の定例行事にした。自宅では料理をしない小学生が多いため子どもたちだけではなく保護者の間でも人気である。毎回定員に達しているので今後も子どもたちが作ってみたいと思うメニューを探りながら続けていきたい。通常期はおやつやデザートなどの軽食であるが、長期休みには食事作りにもチャレンジしている。現時点では『調理体験』に近いものだが、今後は『子ども食堂』の性質を持たせるのも良い。

4年間で振り返って

地元での児童館立ち上げに関わり4年が過ぎた。児童館とはいかなるものか、4年前の自分にとっては遠く思い及ばないことばかりでまさに手探りであった。コロナ禍での異様な緊張感の中、不安な気持ちは隠そうとしたところでどうしても子どもたちに伝わり、不安定になる。子どもたちにとってコミュニティが一元的なのはよろしくないと感じる。例えば、家庭や学校で思うようにいかない場面があっても、下校後自分の意志で通える場所があれば気持ちも人間関係もリセットできる。当館が学校や幼稚園・保育園の出来事を切り替える・リミットを開放する場所になれば良い。今まで来たことがない子たちも一度来て欲しいと思う。また、保護者だけではなく学校や幼稚園の先生たちにも、是非子どもたちの遊ぶ姿を見てもらいたい。そして自分たちも小中学校の行事や学校公開などの機会に子どもたちの姿を見ておくのが良いと思う。

これからの職員像

児童館職員は、利用者は様々な気持ちで館を訪れる、ということを前提にしなければならぬ。良くないコンディションで来館する利用者を上手に受け止めるためには自分たち職員側のメンタルの安定が不可欠であると感じる。職員サイドの心身のケアができていなければ、ささいなきっかけで自身のメンタルが崩れてしまうからである。言うのは簡単だが実際に自己管理やメンタルヘルスのキープをしていくことは大変難しい。職員同士過剰に仲良くする必要はないが、さりげない声かけとお互いのフォローがなされるのが望ましい。そのためにはお互いの普段の姿を知ることが大切である。相手の普段の様子を知ることによって小さな変化に気づくことができるのである。人の行動には理由がある。気持ちの変化が行動の変化になって表れるのだ。もしも行動に変化が現れたとしたらその時点で心の内ではそれなりの事態になっているので注意が必要である。また、言葉は発した側と受

けた側では受け止め方が大きく異なる場合もある。しかし過剰に心配してしまうとコミュニケーションが取りにくくなってしまふので、『このように言われたなら自分は傷つかないか？』『それは自分の家族や大切な相手にも言える言葉か？』を基準に考えるようにしている。子どもたちを見ているとケンカやケガの場面、事故は極力避けたいと思うのが人情で、自分も以前はそう思っていた。だがケンカをして初めて仲直りの経験ができるのだから、もめごとの発生と話し合い、解決までのプロセスから学ぶことはたくさんあるし、問題解決のスキルは大人になる前に身につけておくのが望ましい。もめごとの場面では人の本当の姿が見られる。トラブルや面倒なことから逃げれば周囲はその姿を記憶する。自分はトラブルの際は逃げずに向き合い初期対応をしっかりと行うこと、被害を最小限に抑えること、起こってしまったことをなかつたことにはできないがその場にいた大人として未然に防げなかつたことを保護者に対して誠実に伝えることにしている。この4年間で多くのケンカの仲裁、ケガと事故に立ち合って学んだことである。児童厚生員のテキストにも同じようなことが書いてあったし座学でも学んだが、実践あってこそ身につくものである。迷いのない対応を若い世代の前ですることが大切であると感じている。

みんなの未来予想図

0歳児は1歳になり自力で歩行する。幼稚園児は卒園して小学校に入学する。小学生は学校生活で色々な体験をし、中学生になる。中学生になると急に大人びた様子の中に時折ちらりと昔の面影が見える。高校世代の利用者はほぼ職員に寄った立ち位置で行事やイベントに関わってくれる。児童館利用の時期を過ぎた世代が今頃はサポートメンバー的な存在になってくれたら嬉しい。それは職員と子どもたちとの関わり延長線上にあるものだから、日々子どもたちと丁寧に向き合っていくことが大切である。保護者もまた、乳幼児期～園児期～学童期と、我

が子の年齢によりに変化していく。子育て中は『今が本当に辛い』と思うことばかりだが、子どもの成長はあつという間である。そうは言っても自分は二人の子どもの育児と仕事の両方に追われて何も思い出せない。せめて今子育てをしている方たちが少しでも安らげる居場所づくりができれば良いと思う。また、乳幼児親子や育児中の方たちが当館での小学生の集団遊びや異年齢間の委員会活動を近くで見て、『今は幼い我が子もいずれはここまで大きくなるのだ』と思えたら良い。小学生たちは、館内で過ごす中高生を見て、一緒に遊ぶことや交流などはなくとも近い未来予想図を思い浮かべたら良い。中高生たちは、当館でスタッフとして働く大学生たちや若い世代の職員たちと交流することで、大人になるということを感じられたら良い。利用者がそれぞれの使い道で利用する、リミットのない児童館でありたいと思う。

おわりに

今回の数納賞への執筆にあたり、本文中の紹介を了承して下さった子育てひろばの先生、NPO法人まちだ語り手の会、ひろば文庫、ペスカドーラ町田、サントリービバレッジソリューション株式会社、FC町田ゼルビア他関係各位に深く感謝したい。三輪子どもクラブのメンバーと雇用先にも、私のチャレンジに理解を示してくれたことに感謝している。また、本文には取り上げていないが多くの関係機関や地域との連携による部分もとても大きい。今後も様々なことが起こるだろうが、困難から逃げずに向き合いながら地域に愛される児童館を目指していきたい。